

# 4 今でも確認できる登戸研究所の痕跡

## (1) 生田キャンパスに残る「登戸」の痕跡

敗戦とともに登戸研究所が解散してから70年以上が経過した現在でも、生田キャンパス内には、消火栓・動物慰霊碑などの史跡に加えて、登戸研究所の痕跡が意外な形でひっそりと残っています。  
(この章、撮影者表示のない写真は全て資料館撮影)

### ①登戸研究所時代のプール（貯水池）

資料館向いに現存する貯水池は登戸研究所時代から残っているものです。明治大学の土地購入時にもこの設備が含まれていました。以前は深さが2m程度あり、夏には泳ぐことも出来ました。



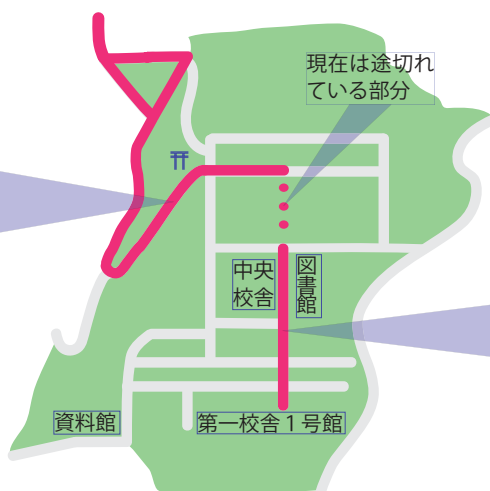
登戸研究所解散直後にはこのような貯水池にも証拠隠滅作業として兵器などが投げ込まれたと言われています。

### ②偽札運搬用軍用道路跡とバイク坂

登戸研究所第三科では、大量の偽札を研究所内で製造し、直接ここから中国へ向けて運び出しました。そのため、偽札を積載した重量のあるトラックが走行できるよう、敷地内には軍用道路が整備されました。その名残が図書館と中央校舎の間の道と、旧弥心神社付近から西門へ繋がる、通称「バイク坂」です。これは敗戦直後の航空写真（第一展示室にて展示中）と比較しても現在と変わらない道筋を示しています。また、この道路上に立つと、南から北に向かって緩やかに低くなっている土地の特徴がよくわかります。



バイク坂



赤線 = 偽札運搬に使用されていた道筋



偽札運搬用軍用道路跡

### ③防火水槽

登戸研究所時代の建物には、消火設備として、コンクリート製の土管を輪切りにしたような「防火水槽」が設置されていました。火災の際には、ここに貯めてあった水を掬って消火する態勢でした。キャンパス内にも現在3つ残っていることが確認できます。

当時の姿のまま埋設されているものは、資料館の入り口付近で見ることができます。大きさは、直径約150cm、地上部高さ約30cmです。

また、中央校舎北側には、移設されて花壇として再利用されているものがあります。その他、ヒマラヤ杉並木と図書館の間の林の中にもひとつ確認できます。



中央校舎前のもの



ヒマラヤ杉並木付近のもの

現在は安全のためシートで覆われている。

### ④旧本館跡（ヒマラヤ杉一帯）の植込み

登戸研究所の面影を最も残していると言われるのが旧本館前のヒマラヤ杉の並木一帯です。ヒマラヤ杉並木自体が戦時中から残るものですが、その足元に目をやると、本館の車寄せへのアプローチの跡である円形の植込みの盛り土が確認できます。



## (2) 元勤務員と巡る北方班跡地と給水システム

岸井三治氏は国民学校高等科卒業後すぐ、1944（昭和19）年4月に少年工員として14歳で登戸研究所で働き始めました。所内の青年学校で2ヶ月ほど教育を受けた後、第三科北方班に配属されました。当時まだ新しかった工場で大型抄紙機を使用し、敗戦までの1年半を偽札用紙の製造に携わりました。

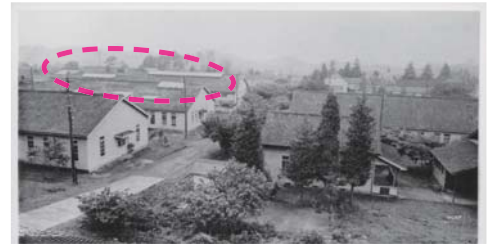
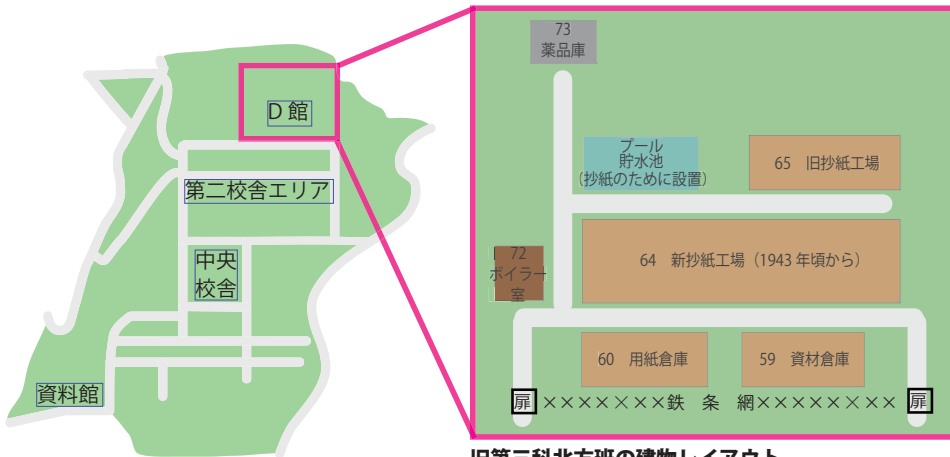
岸井氏と現在のキャンパスを巡りながら当時の様子をうかがいました。岸井氏は、戦後も元第三科科长の山本憲蔵と交流があったため、登戸研究所勤務時には知りえなかった事実も聞いていました。



神社付近の貯水槽について語る岸井氏

## ①第三科北方班の配置

第三科北方班の場所は現在の理工学部側，第二校舎 D 館付近にあたります。岸井氏は登戸研究所時代の抄紙の経験を買われ，戦後は民間で製紙業に携わったこともあり，当時の北方班の製紙の技術や工場，機械の様子などを克明に記憶していました。



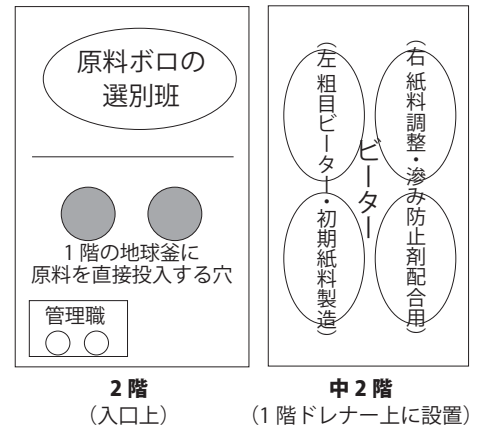
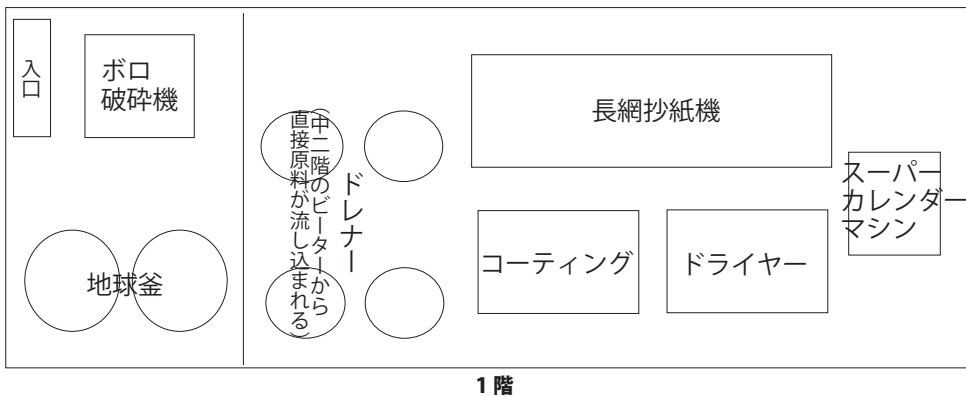
**天窓のある木造の建物**  
新抄紙工場の屋根にも，写真の奥の建物のような天窓（枠内）が設置されていた。1953（昭和28）年撮影。（明治大学所蔵）

### 旧第三科北方班の建物レイアウト

このエリアは，南側が鉄条網で仕切られ，東西2箇所の扉が設けられていた。（建物の付番は1948（昭和23）年の実測図による。）

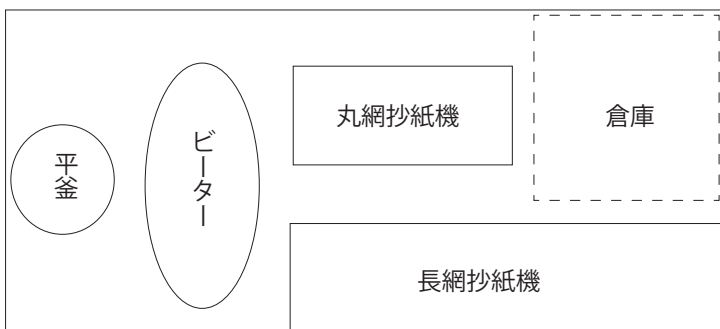
## ②抄紙工場の内部

旧抄紙工場は岸井氏が勤務を開始した1944（昭和19）年には既にあまり使用されておらず，もっぱら試抄のみに使用されていました。岸井氏が新工場で抄いていたのは「漉かし」がなく，絹繊維の線が入った用紙でした。偽札用紙の原料は本物に近づけるためボロなどを使用していましたが，「香港紙」と呼ばれるものが原料として代用できるようになってからはボロは使用しなくなりました。



### 新抄紙工場内部

一見平屋に見える工場は一部，中2階と2階があり，それぞれが，ドレナー（ビーターの中身を受けるもの）の真上，地球釜の真上にあたった。現在の抄紙機と異なり，長網抄紙機，コーティング，ドライヤー（乾燥），スーパーカレンダー（表面のツヤ出し）と機械が独立していた。



### 旧製紙工場内部（1階）

偽札用紙製造開始当初は主要な抄紙工場だったが，新工場ができてからは試抄が必要な時にのみに使用された。2階は漉かしのための彫金・彫刻室。

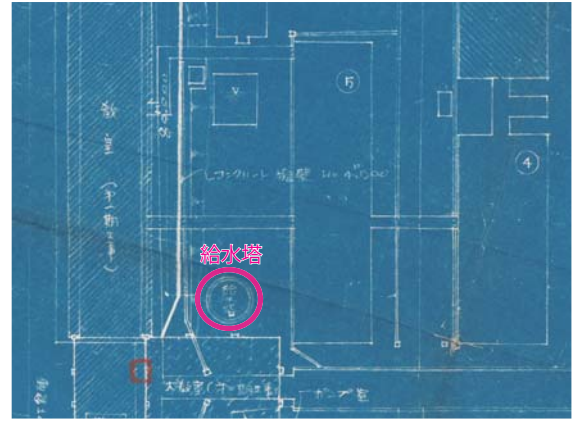
（工場内部図は，ともに，岸井氏の証言に基づき資料館作成）

### ③給水システムと消火栓の秘密

登戸研究所第三科北方班では、抄紙を行うため大量の水が必要でした。そのため、緩やかに高くなっている研究所南側に給水塔（右図円内）を設置し、そこから高低差によって、低くなっている北方班側や敷地内全域に給水しやすくしたようです。岸井氏によれば、偽札の紙の製造は極秘とされていたため、敷地の南北を縦断する大規模な給水設備は、偽札製紙という本来の目的を隠すために、表向きは配管に沿った消火栓の整備という名目で整えられたといえます。（登戸研究所時代の消火栓は、図書館前と食堂館前に現存しています。）

また、登校路門を上った先、神社手前のフェンスで囲まれた場所には、登戸研究所が設置した、外部から引き込んだ水を貯めておく地下タンクが「防火水槽」として残っています。

さらに、登戸研究所設置の翌年の1938（昭和13）年には、生田浄水場（現・生田配水地）が近隣に開設されます。同浄水場が登戸研究所へ送水していたと考えると、所内の設備に加え、所外においても登戸研究所では大量の水の使用を可能にする設備が整えられていたことがわかります。



「給水塔」が残っていた時代の図面（部分）

1959（昭和34）年9月、農学部校舎第一期工事（第一校舎1号館新築工事）時作成。  
（明治大学所蔵）



神社付近の防火水槽

生田浄水場から引いた水はこの暗渠の貯水槽あんきよに一度貯めた。現在は防火水槽になっている。

## (3) 稲田郷土史会の調査 - 複数の「境界石」

資料館では登戸研究所の境界を示す「陸軍」と彫られた石柱「境界石」を所蔵しています。館内レストスペースと、外の資料館看板付近に移設されたものが現在公開中です。

登戸研究所保存の会や稲田郷土史会は、資料館開館以前から登戸研究所の史跡について調査をしてきました。キャンパスの外にはそれらしきものはほとんど残っていないながらも、稲田郷土史会による調査から、「境界石」が周囲にいくつか残っていることがわかりました。ここでは同会による2009（平成21）年の調査記録を紹介します。



現在も残る境界石

境界石柱の位置

09 02 15



境界石柱の形



①



石柱 NO.	所在地
境界石柱 ①	伊藤邸色(伊藤邸跡)から明大正門まで約200mの道(現在は茶畑跡)にあり現在中絶された。
境界石柱 ②	明大正門への通りから伊藤邸跡へ入った際の側溝にあり現在中絶された。
境界石柱 ③	同1丘道国鉄北側、小田急線踏切と、吉澤島尖尾(湖田産)の石として使用。

②



③



稲田郷土史会 陸軍登戸研究所「境界石」調査記録

2009(平成 21)年の調査記録。現在ではこれらの3点の境界石は一般には公開されていない。(稲田郷土史会所蔵)